

## IV なぜこのような事態が起きたのか ―― 過失と故意のあいだ

本件番組『ありえへん∞世界』は、テレビ東京が上に記した南大東村長宛てのお詫びで述べているように、「さとうきび生産への偏見あるいは南大東島を揶揄するものではなく、バラエティー番組として他村にない南大東村の独自性と魅力を伝えるよう番組制作を行ったつもり」で企画された。

委員会は、この同じ番組が以前に放送した別のへき地をテーマとした回を参考資料として視聴したが、そこにはたしかにへき地をおとしめることがないよう極力注意している様子うかがわれた。また、番組プロデューサーも委員会が行ったヒアリングにおいて、「あとで取材された人に、取材を受けなければよかったと思われるような番組はけっして作りたくないと思ってきた」と語っている。

しかし、そうであればなぜ、今回はそうならなかったのだろうか。

なお、委員会がヒアリングを行ったのは、この番組プロデューサーのほか、総合演出、構成作家、担当回チーフ・ディレクター、ロケ・ディレクターなど、本件番組の制作を主に担当した5人である。

\*

本件番組は、ナレーションに戯画的な関西弁を多用し、番組全体に関西弁特有の毒気とユーモアを織り交ぜながら、取り上げるネタを料理してみせようという番組である。東京で制作され、スタジオトークの芸能人・タレントも関西人に限っていないが、その語り口調の面白さを前面に出そうとしている。

また、実際、制作の中心にいる総合演出と構成作家の2人は関西出身であり、番組スタート当初から、この2人が普段に、またVTRを見ながら交す「ボケ」と「ツッコミ」的かけあいがナレーション原稿に反映され、本件番組の基調となるトーンが形成されてきた、という経緯もあった。

しかし、言語的かけあいから面白みを表現することは、その言語の持つ歴史的・文化的背景への理解や、ひとつひとつの言葉を駆使する高度なテクニックが欠かせない。それを母語としない人たちが、表面的に言葉遣いをなぞっただけでは、たとえば揶揄は文字通りの揶揄となり、毒はただの毒となってしまう。

また、たとえ関西弁の使い手がスタッフ内にいたとしても、番組制作の場合には、VTR、ナレーション、スタジオトークの全体が互いにツッコんだり、ボケたりと、有機的にかみ合っていないければ、かけあいの面白みのない、ときにはとげとげしいものになってしまう。こうした意味では、この番組にはもともと高いハードルがあったとすることができる。

以下では、番組制作のプロセスをたどりながら、本件番組の問題点を検証していくことにする。

## 1. ロケ台本

南大東島取材を担当した30代のロケ・ディレクターは制作会社に所属し、本件番組の制作に参加してまだ日が浅かった。初めて単身で、撮影機材を持ち、事前の予備取材（ロケハン）もなく、いきなり本番用の取材をしなければならないことに、本人は「大変だなと思った」と、本委員会のヒアリングの場で語っている。

なお、このロケ・ディレクターは南大東島の現地取材のあと、その後のVTRと資料映像の粗編集、ナレーション原稿の下書き等も担当することになる。

彼は出発前、担当回のチーフ・ディレクターらに聞き、インターネット等で調べて、どのような取材内容になりそうかを想定した「ロケ台本」を作成した。

そこには、「若い子が（通信販売の）ダサイカタログをみている」「こんなへき地なのに年収ウン千万も」「成金なんや」などといった、へき地とそこで暮らす人々に対する侮蔑や揶揄が色濃く感じられる想定ナレーションや仮のコメントがこまかく記されていた。

なぜこのようなロケ台本が作成されるに至ったのだろうか。

\*

前に見たように、本件番組は関西出身の総合演出と構成作家が日常的に交している毒舌的なかけあいを基調トーンとし、番組の個性としてきた経緯があった。戯画的に誇張された関西弁風のナレーションが使われているのも、それゆえだった。

ロケ・ディレクターはこのトーンを模倣しようとした。生真面目に過剰適応した、と言ってもよいかもしれない。しかし、うまくいかなかった。つまり、高いハードルを越えようとして越えられなかった「過失」である。結果として放送された番組は、このロケ台本にあるような侮蔑や揶揄のニュアンスがそのまま転写されてしまった印象が強い。

このロケ台本には、担当回のチーフ・ディレクターが赤字で書き込んでいねいなコメントが記され、ロケ・ディレクターの「思い込み」や「決めつけ」をたしなめている。チーフ・ディレクターはヒアリングでも、「面白がり方が、たんにふざけているだけのように感じた」と言っている。

チーフ・ディレクターはこのコメントをメールでロケ・ディレクターに送り、その後の電話でも追加説明をしているが、その趣旨がきちんと伝わったかどうかは不明である。初めて、単身で現地に赴いたロケ・ディレクターはなかなか「ありえへん」ような話題が見つからないまま、自分で書いたロケ台本に「縛られ」るようになる。本人は「へき地という企画や、ありえへんという番組イメージが頭のなかで先行し、そこに縛られてしまった」と語っている。

\*

とはいえ本件番組は、取材対象に向けられる揶揄と隣り合わせの視線に対し、みずからツッコんだり、ボケたりしながら、笑いへと転じていこうという高度な技術やセンスを制作スタッフと出演者の全員に要求する、ある意味では気概に満ちたバラエティーを目指していたはずである。たとえロケ・ディレクターの取材してきたものがこうした番組の狙いを満たさないものであったとしても、そのズレを見逃すことなく認識し、その後の編集やスタジオワークのなかで、1段も2段も高い笑いへと変換して番組化するのには、番組制作の中核にいる幹部制作者たちの仕事である。

彼らが、経験の浅いロケ・ディレクターひとりに現地取材を任せてしまった、という制作体制の落ち度を指摘しないわけにはいかないが、同時に、取材素材を十分に吟味し、そこから番組が本来目指していたバラエティーらしい笑いを創作できなかった点も見逃すことはできない。

## 2. 取材～編集

本件番組中、ナレーションが「(沖縄) 本島に家があることが島民のステータスになっとるらしい」と説明した「別荘」をめぐる問題について、ロケ・ディレクターとサトウキビ農家の男性とのやりとりは、取材テープに以下のように記録されていた(テレビ東京が本委員会に提出した報告書による)。

質問「もしかして家は豪邸なんじゃないですか？」

男性「いえ、ここの家は、小さいんですが、その代わり沖縄本島にも家があって、そっちには金かけてます」

質問「なぜ別荘があるんですか？」

男性「島には高校がないので、子どもが高校生になると本島に出て行くので、本島にも持ち家がないとダメなんです。高校・大学と成人までに1000万円以上かけないと子供たちを教育できないもので、だからその分サトウキビ作って1000万以上儲からないと子供たちを教育できないということですね」

ここに明らかのように、ロケ・ディレクターは取材時点で、島民たちが沖縄本島に家を持つ理由を明確に聞き取っていた。つまり、それは富裕であることを誇るための豪邸などではなく、島民たちが島の地理的・文化的条件の下で子供たちの教育を考え、必要に迫られて借りたり、所有していたものだった。

だが、本件番組ではこの理由を述べた後段の部分がカットされ、そこにあたかも南大東島の農民が沖縄本島に所有しているかのように、白いコンクリート造りの立派な家のイメージ写真が映し出され、さらに「要はハリウッド俳優がビバリーヒルズに家を建てるようなノリや」というナレーションとともにハリウッドやビバリーヒルズの

豪邸の写真がかぶせられ、その上もう一度だめ押しのように沖縄にあるという白いコンクリート造りの家が高価なハーベスタと並べて映し出された結果、彼ら農民は「ありえへん」くらいお金持ちだから、こういう豪勢な別荘を実際に持っているのだ、と強く印象づける編集・演出が行われていた。これは明らかに事実を無視し、視聴者の認識を誤らせる編集であった。

ここで再び、本意見書の「はじめに——飛行機とロレックス」で触れた情報処理をめぐる問題が浮上することになる。

テレビ東京は、南大東村長宛てのお詫びのなかで繰り返し「視聴者に誤った印象を与えかねない表現となってしまった」と述べ、「過失」を強調している。しかし、この「別荘」の部分に関しては、飛行機の存在を伏せて「へき地」感を誇張したのと同様に、意図的な情報操作が行われている。つまり、これは過失ではなく、「故意」である。

\*

じつはロケ・ディレクターは南大東島からの帰途、沖縄本島に立ち寄り、取材した男性とは別のサトウキビ農家が所有している家を撮影していた。むろんビバリーヒルズにあるような豪邸ではないが、それなりにしっかりした家だったという。

ところが、撮影したビデオテープがなぜか破損し、使えなかったという。彼はこの失態を幹部制作者らに報告できなかった。追加撮影を申し出られる状況は、予算的にも日程的にもなかった。困った彼は沖縄の一般的な町並みの写真をダミーとして挿入し、粗編集したVTRを幹部制作者らに見せた。

番組プロデューサーや総合演出はそれを見て、「写真でもいいから、実物の映像はないのか」と質し、ロケ・ディレクターに手配するよう指示した。ロケ・ディレクターは南大東島に電話し、その返答を待っていたあいだに、演出プラン作成の会議が開かれることになった。

\*

演出プラン作成のための会議は、ロケ・ディレクターが粗編集したVTRをプレビューしながら、主には総合演出と構成作家の関西弁のかけあいによって進められた。この時点でのVTRでは、先に引用したインタビューの後半がカットされていたので、2人は島民たちが沖縄本島にアパートを借りたり、家を持ったりする本当の理由を知らなかった。

席上、総合演出と構成作家はその家について、「これは、ハリウッドスターがビバリーヒルズに別荘を持つようなものや」「それがここに住む人たちの南大東島ドリームと言ってもいいんじゃないか」等々と演出のアイデアを出し合っている。

ロケ・ディレクターはこのやりとりを聞いて、実物の家の写真ではなく、演出アイデアに沿って、それらしい豪勢な家の写ったイメージ写真と、「ハリウッド」や「ビバリーヒルズの豪邸」の写真を挿入すればよい、と思いつく一方、本件番組で使われた

ような、「本島に家があることが島民のステータスになっとるらしい」「要はハリウッド俳優がビバリーヒルズに家を建てるようなノリや」「1台6000万円のハーベスタを所有し、沖縄本島に別荘。それが南大東島ドリームというわけや」等々のナレーション用の粗原稿をまとめていった。

結局、沖縄本島にある実物の家の写真については、その後の慌ただしい制作過程にまぎれ、立ち消えになっていく。

＊

ヒアリングによれば、こうしたプレビューの前後、総合演出はロケ・ディレクターに対し、「このような表現をしても大丈夫か」と確認を求めたという。これは沖縄本島にあるという家に限った質問ではなく、VTR全体に関する印象を問い質したものであった。

そう問われてロケ・ディレクターが真っ先に思い浮かべたのはその家の問題だったという。たしかに別荘の意味合いは、島民が沖縄本島に家を持つ理由の削除と、まったく別の白いコンクリート造りの家の写真を挿入したことによって、現実とはまったくちがうものに変質してしまっており、「ハリウッド」「ビバリーヒルズの豪邸」というナレーションや映像の追加によって、そのズレは決定的になっていた。しかし、ロケ・ディレクターは「サトウキビ農家の人々を島の金持ちとして紹介するということはあらかじめ取材相手には了承を得ており、大丈夫だ」と考えた。

たしかに取材を受けたサトウキビ農家の男性は自分の畑を指差しながら、「まるで1万円札がたくさん生えているような感じです」と語っている。だが、ロケ・ディレクターが収入と利益（所得）の相違を誤解し、制作幹部らもこの誤解を見過ごしたうえに、本島に持つ家の意味合いを編集によって変更してしまった結果、本件番組では、金持ちイメージのみが「ありえへん」話として、また受け止め方によっては不当に利益を享受している農家の姿として、ネガティブに増幅される結果となってしまった。

ここでは制作スタッフが考える「面白さ」が、取材を通して把握された「事実」よりも優先されてしまっている。その「事実」を守り得たのは現地で取材をしたロケ・ディレクターだけだったが、彼もまた「ちがう、と感じたことはなかった」とヒアリングの場で語っていて、特段の違和感を感じた様子はない。

こうした一連の編集作業によって、本件番組は「事実に基づ」かず、「公正」さに欠けた「過剰な演出」となり、「一方に偏るなど視聴者に誤解を与え」るだけでなく、そのことによって取材に協力してくれた「個人」と、南大東島に暮らす人たちの「名誉を傷つけ」るような素地が作られていった（この段落のカギ括弧は、民放連放送基準の該当箇所からの引用を示す。詳しくはのちの「委員会の判断」を参照）。

＊

仮にの話だが、このときもし現地を取材した若いディレクターが違和感を感じてい

たとしたら、どうだろうか。

取材現場に立ち会っていないスタッフ、とくに幹部制作者らによって後出しで加えられる「それはさあ、〇〇と解釈しても間違いとは言えないんじゃないの？」という演出プランに対し、「それは違う」と抗うことは、一般の若いディレクターにとってはなかなか困難な場合もあるにちがいない。

だが、こういうときこそ、取材に協力してもらった人たちの顔を思い浮かべ、もう一度立ち止まって考えてみる必要があるのではないだろうか。とりわけ一般人を取材対象とする本件番組のような場合、番組はスタッフだけで作っているのではなく、その外側にいる多くの協力者によって支えられている。ここには、制作者は取材協力者との関係をどう考えるのか、という問題がある。

### 3. スタジオワーク

一般的に言って、南大東島の島民が沖縄本島に家を持つことを「南大東島ドリーム」と比喩的に表現すること自体に間違いがあるわけではない。

番組プロデューサーも総合演出も構成作家もヒアリングのなかで、本件番組は、VTRとナレーションとスタジオトークの3者が、互いに互いを批評し合いながら有機的に結びつき、発展していくことによって面白さが醸し出されるような種類の番組である旨をこもごも語っている。

つまり、沖縄本島に家を持つという話題に即してみれば、ナレーションで「南大東島ドリーム」と大仰に煽っておいて、「ハリウッド」「ビバリーヒルズの豪邸」とたたみかけ、実際にはそれほどでもない家を映像で提示し（ボケる）、それを受けてスタジオトークが「ビバリーヒルズは言い過ぎだ」とツッコミを入れる——これが彼らが期待した望ましい展開だった、ということであろう。

しかし、本件番組では、そのターニングポイントになるはずだった家の映像がなく、代わりに挿入されたのが、白いコンクリート造りの立派な家というイメージ写真であり（ベタ＝ありきたりで陳腐）、つづいてハリウッドとビバリーヒルズのイメージ映像を伴う月並みなナレーションがこの映像と同じベクトルで追随し（ボケられなかった）、さらにはスタジオトークも同じ方向で感嘆の声を上げるだけで、全然切り返していない（ツッコめなかった）。ここには面白いかけあいはなく、発展していくダイナミズムも生じていない。

なお、通常、この番組のスタジオ収録には、芸能人やタレントなどの出演者用の台本は用意されていない。制作者側が想定し、期待するようなスタジオトークに発展していかなかった場合でも、撮り直し等はしないという。

結果として、ツッコミやボケのかけあいを誘発するきっかけがないまま、南大東島のサトウキビ農家は沖縄本島に豪邸を持っている、という間違った「事実」が番組に

よって認定され、ベタのまま独り歩きをしてしまうことになった。こうして本件番組は、島民たちの現実を置き去りにし、事実から遊離した過剰な演出となり、視聴者に誤解を与えるだけでなく、島民たちの名誉を傷つけるものとなった。

\*

本件番組の最後に、新成人となった地元の青年へのインタビューがあった。そこに「サトウキビ農家はカネも女の子も手に入るおいしい仕事やった」というナレーションがかぶせられている。これはいささか下品な、視聴者によっては制作者の制作姿勢に嫌悪を感じるような終わり方だった。

たしかに青年は、この年代にはありがちな背伸びをした発言をしたかもしれない。カメラの前でそうしゃべったのだから、その映像を使うことに何の問題もない、と言うことはもちろんできる。

しかし、これもまた前段の豪邸やハーベスタについての「ありえへん」ような金持ちぶりと、それがあたかも過大な補助金という手段によって可能になったかのような説明のあとに置かれると、ただの揶揄、後味の悪い嫌味のようにあり、番組が目指したはずの面白い、笑いに満ちたバラエティーからはほど遠いエピソードにしかなくなってない。